

気候・気象情報の提供について

田宮兵衛

1988年10月4日から6日、微気候観測の実習を目的とした地理学巡検Ⅱ（2泊3日、2年生対象、参加者は3年生3名を含め25名）を、筑波大学菅平高原実験センターの施設・器材を借用して実施した。同センター関係官各位の御助力に謝意を表す。

自分の体力の低下の見積りに厳しさを欠いたため、時間の配分等計画立案について、担当教官として反省すべき点は多い。これについては本号の学生側の報告で指摘されるであろう。また、観測結果を含めた全体の総括については、地理学巡検のテーマとしての気候観測のあり方の議論と併せ別途報告する予定である。

本文は、「如何なる情報が与えられていれば、寒さに対応できたか」という問いに対する学生のコメントを整理したものである。この問いは、観測中に学生がかなり寒そうにしていたことから、あらかじめ提供しておくべき気候・気象情報の内容を検討する資料を得るため行ったものである。

まず、5日の観測時間中の天候について概略を述べる。早朝の観測；霧のち晴、気温は4時30分の7～8℃から8時の10℃。午後の観測；晴のち曇のち雨、気温は、12時の12～13℃から15時過ぎの10℃。雨は15時過ぎに降り始め、風は観測地点によってはかなり強かった。午後の観測開始の直前までは穏やかな陽射しの観測日和であり、これに惑わされて軽装にしたため寒さを感じた学生も多かったようである。

なお、巡検の説明会（9月16日）では、早朝観測を行うこと、携帯品リスト中に防寒具（さらに「霜の降りる可能性があります」と注意書きした）を挙げた配布資料に基づき説明を行っている。これに対し、特に質問等がなかったので情報は十分であると判断した。

さて、コメントの内容を整理してみる。ただし、表現を変更、解釈が若干恣意的な部分もある。寒さに対する準備については、実際に寒く感じたかどうかは別として十分であったらしいもの4名、不十分と判断できるもの21名。事前情報については、十分と明瞭に答えたもの2名、不十分19名、文脈から不十分と判断されるもの4名である。

事前情報に対する要望は、具体的な耐寒装備を示すこと、気候・気象情報を客観的に示すことの2種に大別できる。前者は、オーバー等の衣類や使い捨てカイロが必要であることを、おどかすくらい強調し、覚悟を決めさせるべきである、ということになる。後者として具体的に要求された情報は、次のようなものである。①過去3年間の平均気温、②平年の最高・最低気温、③明け方の気温の見当。またその表現としては、④東京の何月頃の気温に相当するか、⑤東京との差。このうち、④が一番多く9名あった。

これらの要求はもっともであるが、①～⑤のような情報だけで始めての土地の早朝の気温を思い浮かべること容易なことではないだろう。学生の一部からも同様な指摘があった。とすれば、衣類・カイロの必要性を示す方が有効であるということになる。ただし、カイロはともかく、衣類については女子大学勤務半歳に満たない小生には、何とも言い様がなかったのが現実であった。あるいは、①～⑤の情報があれば、納得せざるを得ないということかもしれない。

当方としては、先に示した、「霜の降りる可能性があります」で、すべて尽くしたと思っていたのであるが、どういふ条件の時に霜が降りるのか分からなかったというコメントが2名から出ており、説明会でその点確認すべきであった。他方、個人で気を付けるべき問題である、認識が甘かった、事前にもっと調べるべきであった、というようなコメントもあった。

このように、気候・気象情報に関する要求は、お茶の水女子大学文教育学部地理学科2・3年生25名という集団でもこれだけバラつくのであるから、万人が役にたったように思う気候・気象情報の提供は難しいことを改めて感じた。生活に基づいた表現という要求もあったが、生活は各人異なるのでさらに困難であろう。

なお、指導教官としては、気温が同じでも日射の有無や風により体感がどのくらい違うか、都会生活なら傘をさす程度でしのげる雨でも仕事によっては大変であること、天気は変わるものであることを認識してもらえたとすれば、意義があったと勝手に考えている。